

向阿上人繪詞傳 下



向阿上人傳卷下

上人のふりふ思惟の法はくくくく

はるふ一夜の法乃得益の法は

たのふ二尊遣迎はる方便なりき

千鈞の弩いひる籠籠のふり小機

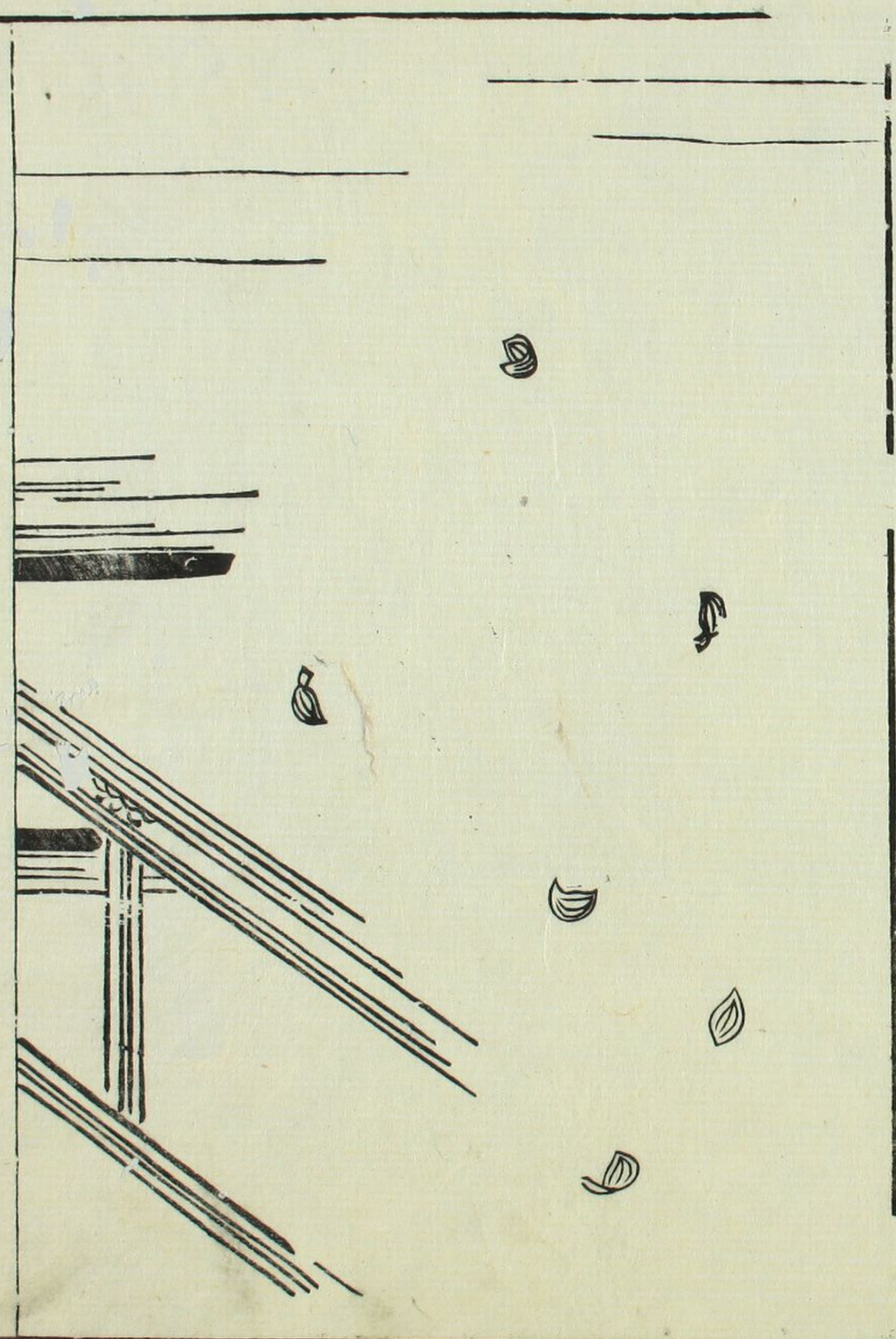
を發して大聖乃慈悲なるを偏ふ

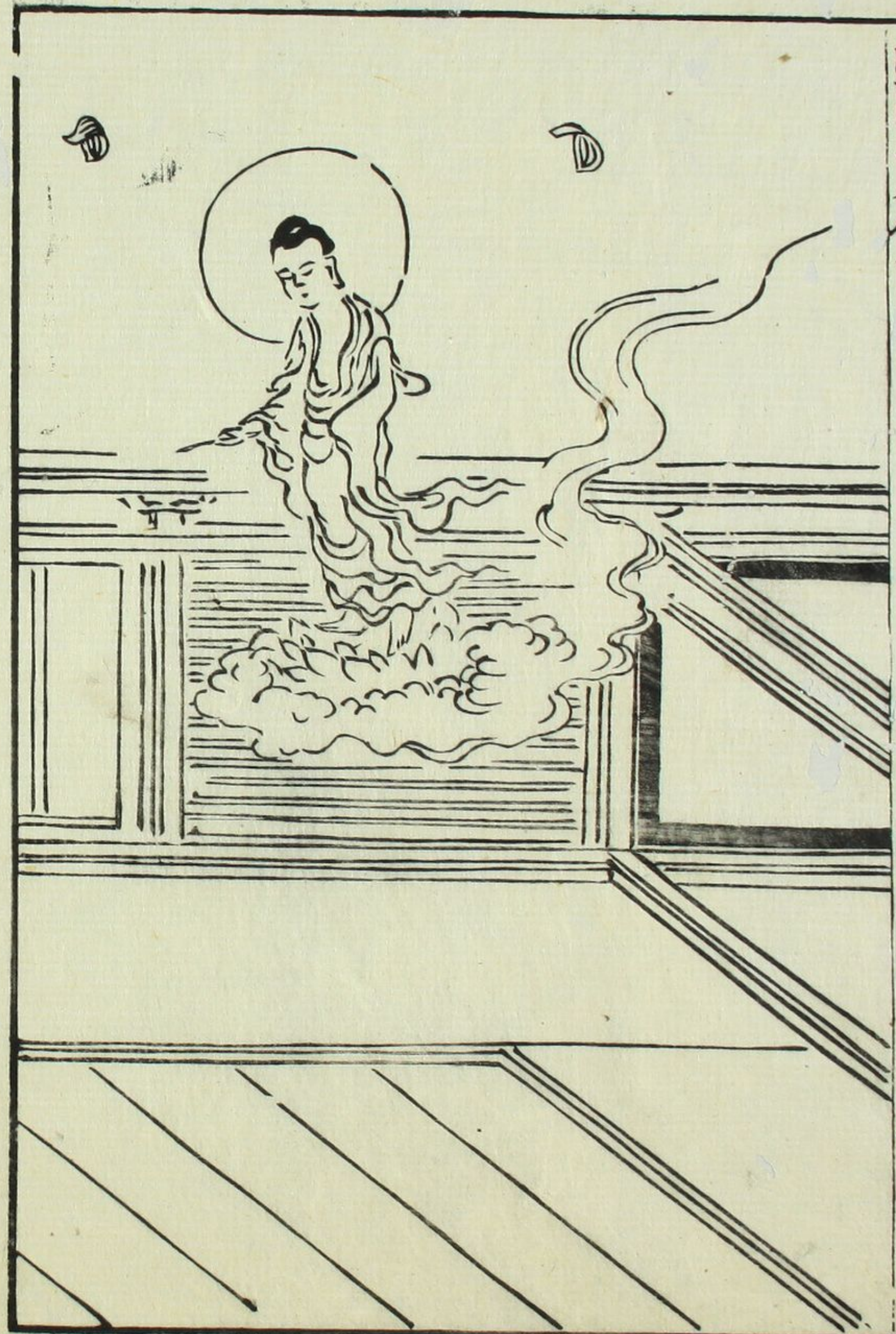
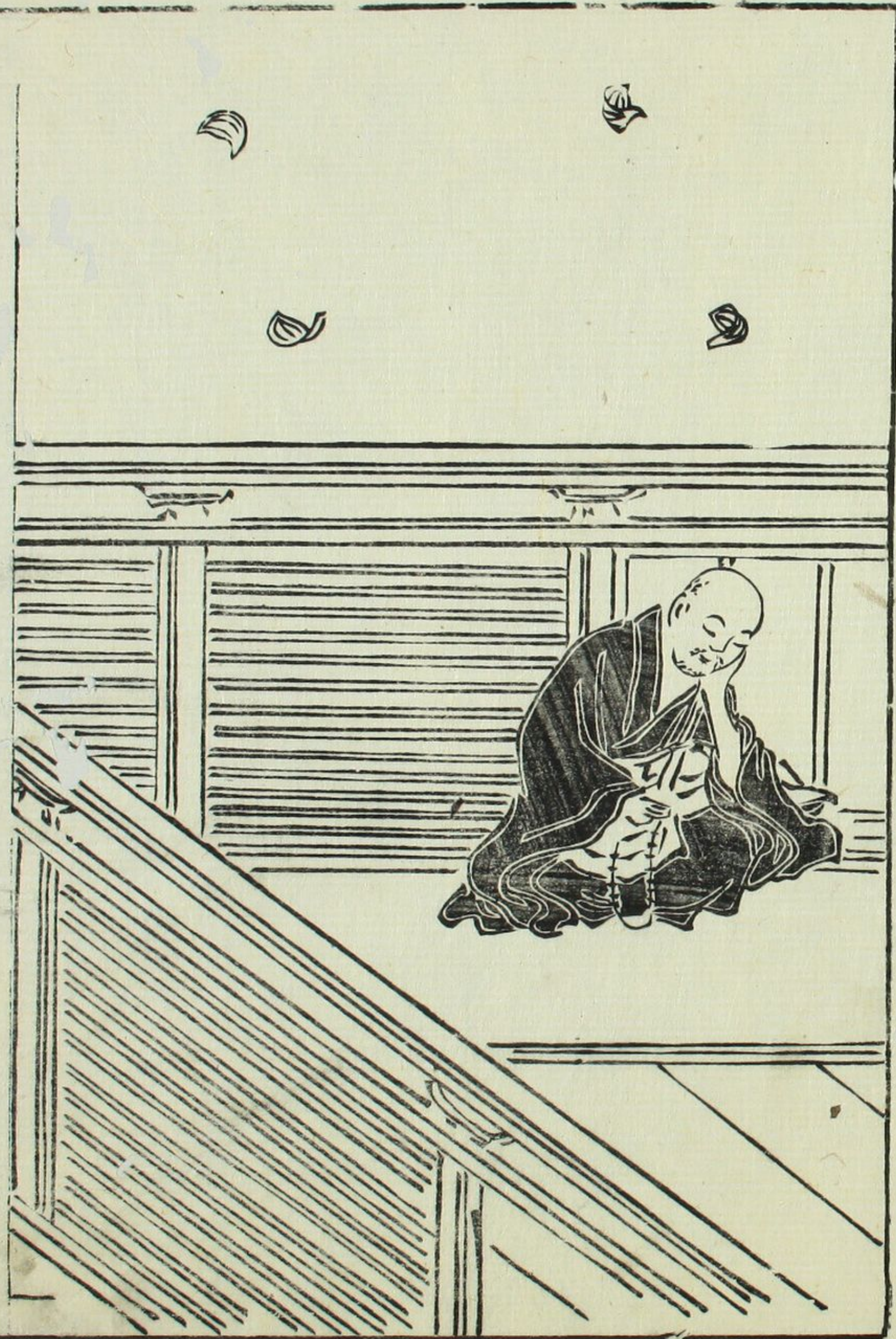


わる免乃そなるんせよるく所聞
 飯筆記ひらとく遊代だうよつる過拜と
 ねまふ此らく一冥慮めいよりなるふ屋
 いれや真實ちんの佛勅ぶつたりせい其志
 流りゅうく心志しんゆるく給たまへるく重おもく極樂
 寺てらよ一七日いちにち糸籠いとして此事このことを願禱ねが

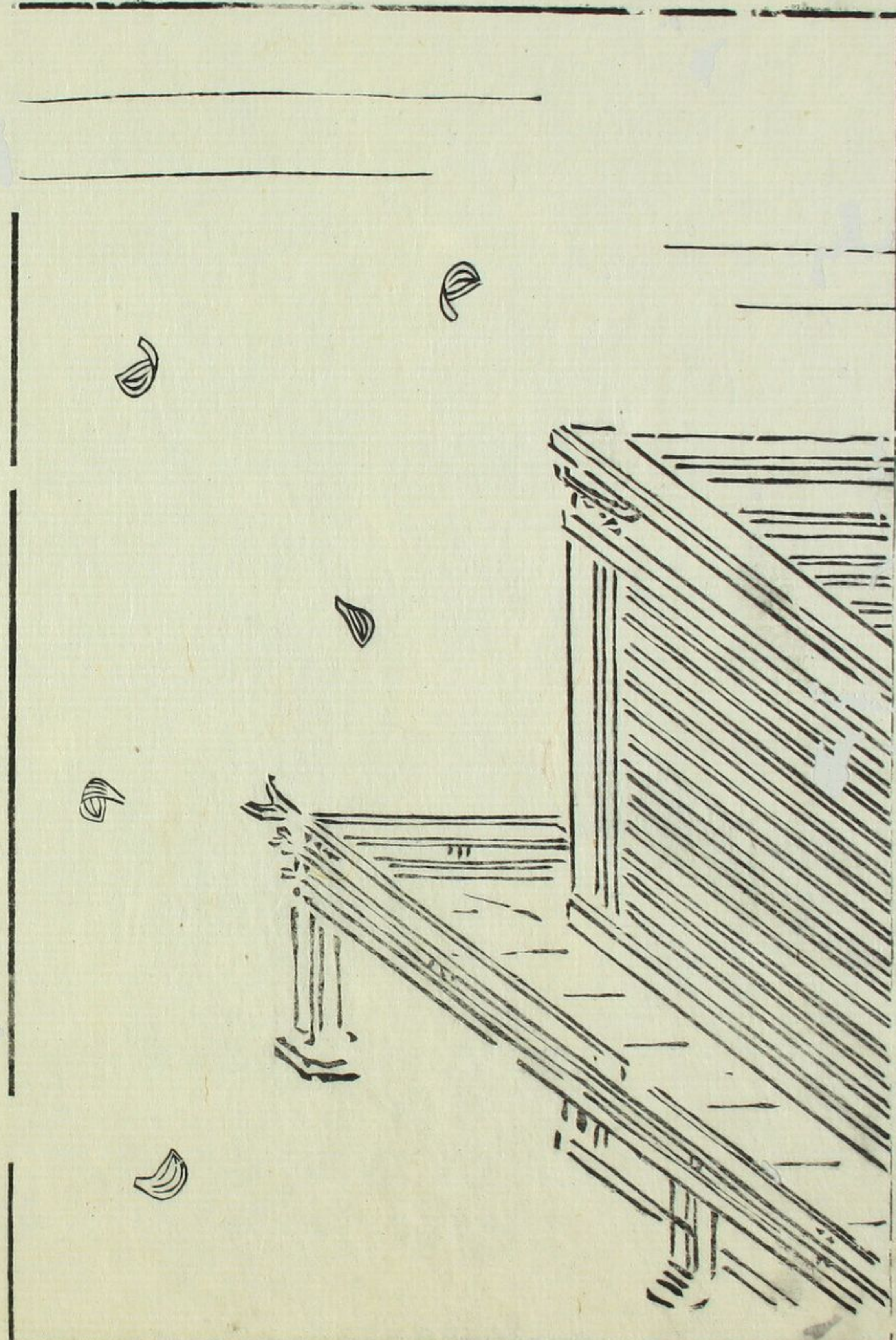
給へるよ心志しんのこころこころなるけ海散うみ
 本尊出現ほんそん志給しひてはれよ
 志免とくくろ實まことに大悲だいひの本懐ほんたり
 むを法門ほふもんふ不審ふしんあり清涼寺せいりやうよ
 糸籠いとも過あやしく筆ふでをまじやのこころ
 ねはえてまはれはれい掌てのひら中なかつよ

現げんよ一いつ管かん乃筆ひつあり不ふ思し議ぎあり
 事ことらるる一いつのものらるる一いつのものらるる
 の巨こ筆ひつを多ゆ見けんに滝たきの教きょう書しょ紙し
 多たよ見けん一いつのものらるる一いつのものらるる
 ちしとくおしとくえつ





向阿上人傳下



聖年しんねんの秋あきなる月つきは廿日にじゅうにちあり
 に佛ほとけ初はつめより南みなみの嶽たけ乃なり轉まわり置おき
 よる露つゆ一ひと粒つぶ物もののあり秋あきは
 秋あきのちとあり先まへの物もののあり秋あきは
 感かん思し之のさしむるものあり七日ななにちあり
 之の心こころをさしむるものあり七日ななにちあり

いづれもくもくをさしてはたすの備
 ぬく三ちしんめらまて南無思徳
 廣大釋迦善逝くろなびちやうぜんとあしたのよるおのほつたも
 ちんしんおんぜんの廣大のよるおのほつたも
 よまへくもくをさしてはたすの備
 あらく釋迦のよるおのほつたも

しんしんて誦きおたすの備
 ねいへくち事の結ちんあ堂どう
 めいし見うくちあ異人いじんちん
 ちんあしんあ法みあぜんあしん
 めいあしんあ見う釋迦乃方便あ
 ちんあしんあ見うあちんあぜん

を神と尊みんらん其下に宗範の
 貴人の後老僧を居た口入ひく
 男女面ふい好く事致法信あり
 志川のていれを道流より去年
 西戸よき流より事母好た
 演説して其より化風流の度いふを

此の法書なるに如くもさう
 阿流のころ聖山書といふは威儀
 法を説く法よして四衆の教網
 うねるはて三説の法輪なる
 法流のころ聖山書といふは威儀
 法を説く法よして四衆の教網
 うねるはて三説の法輪なる
 西戸よき流より事母好た

之出於へい群集乃貴賤之由の事
えんよ
 一くそそをのく退散ゆの事
たえん

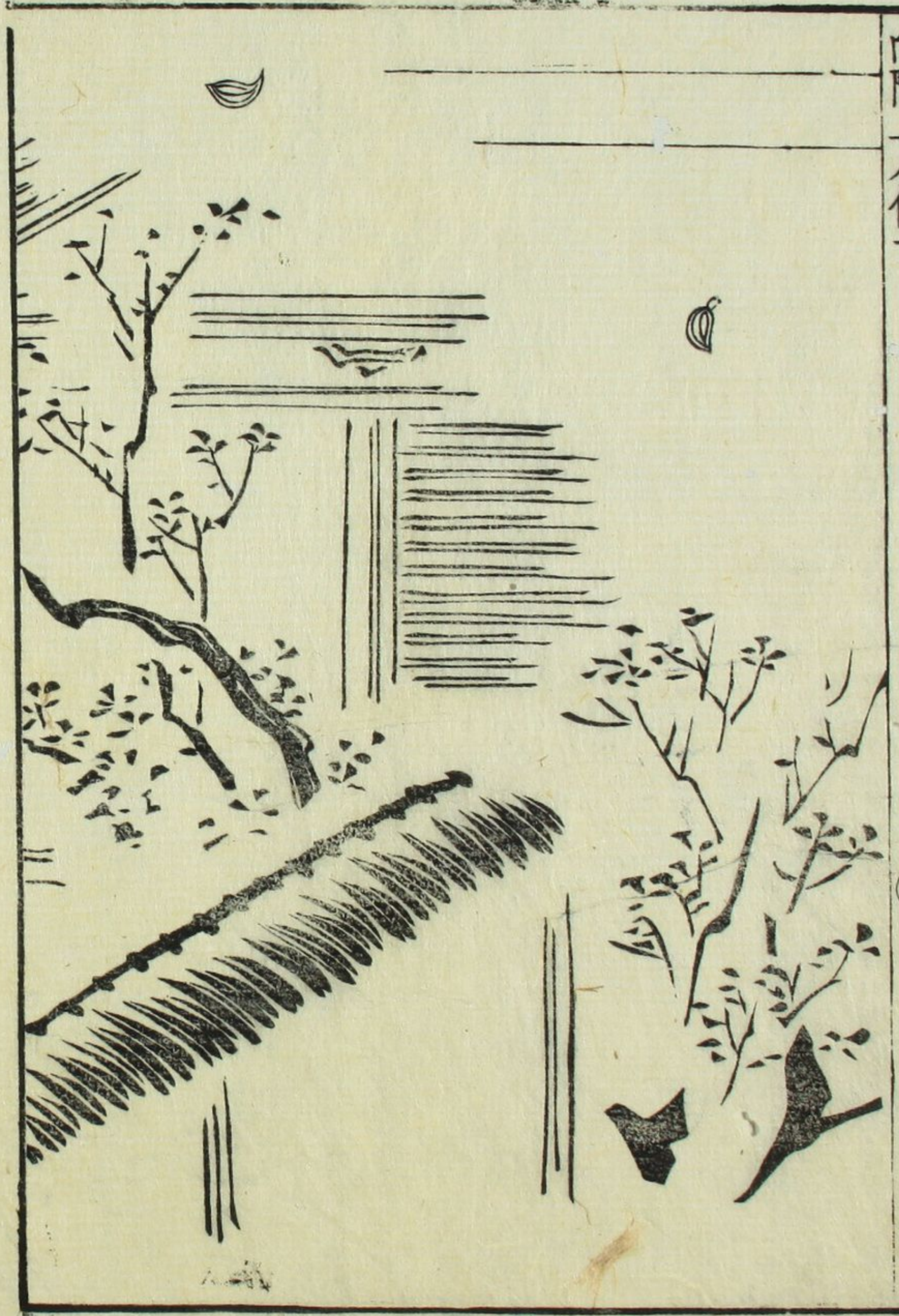
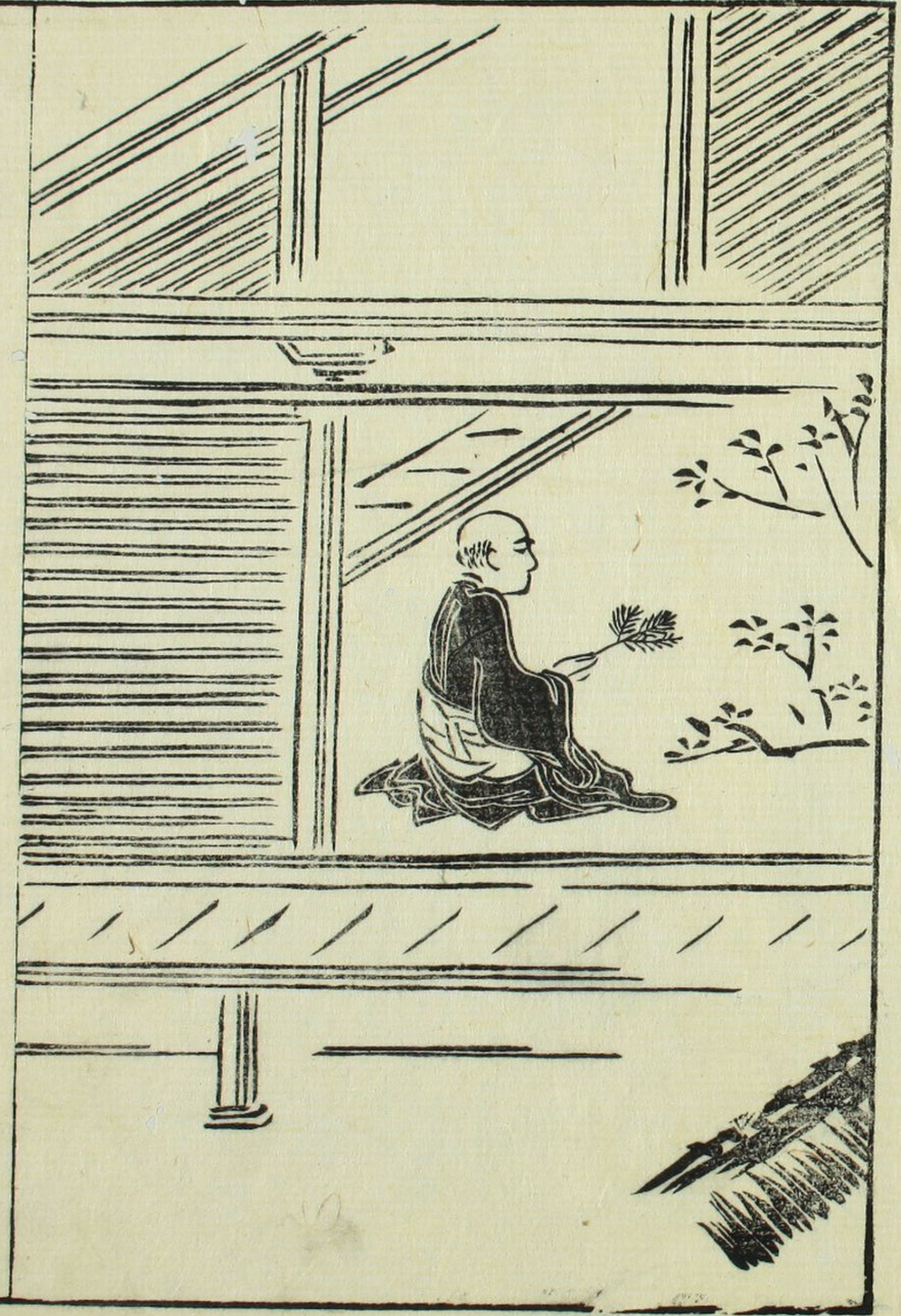




寂小上人去年乃秋真如堂
 してちるくはく家盡多た
 むれいぬ事をんちくせり
 佛思安あよむ高波たす法をあら
 乃まに志をてたの建言は指南
 残を海く其夜はらに

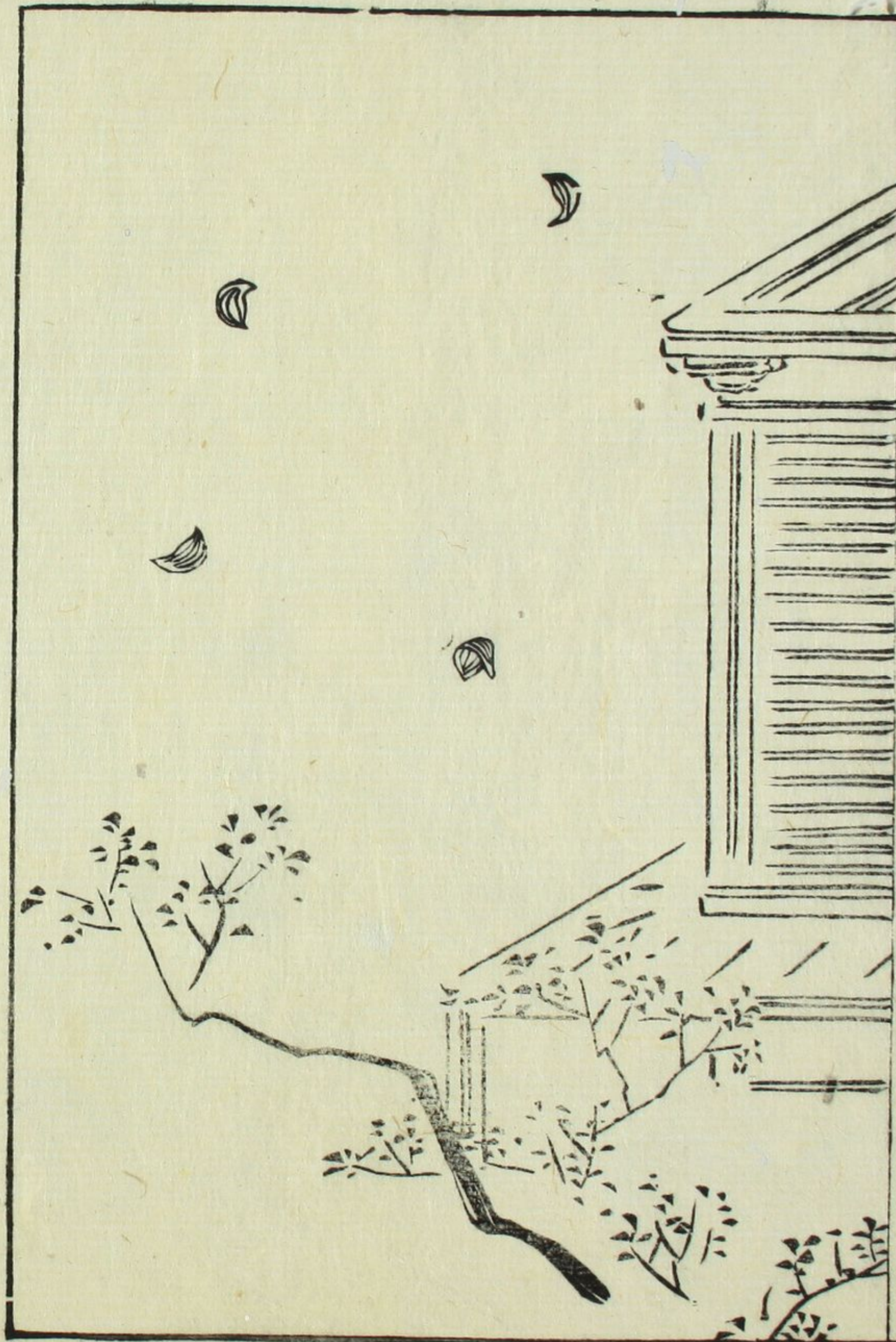
法華に「さうして、たゞの法を説くは
 へまに尊像まじへしに好まら
 ぬや」として、氣あし、うまは法華！
 て桃李ハ一月に葉花松を千年
 乃縁之純法流一散利物偏増乃
 志も一たりとのまほしく松の枝

を結つるをいふて、おほくはあはれし
 現り一葉は松ありに末る有乃
 事たりしは世の法華を
 こ乃松をいふは、いふは、いふは、
 法華院の鴻寶とたるとしてを來
 かりありしとて



向阿上人傳下

+

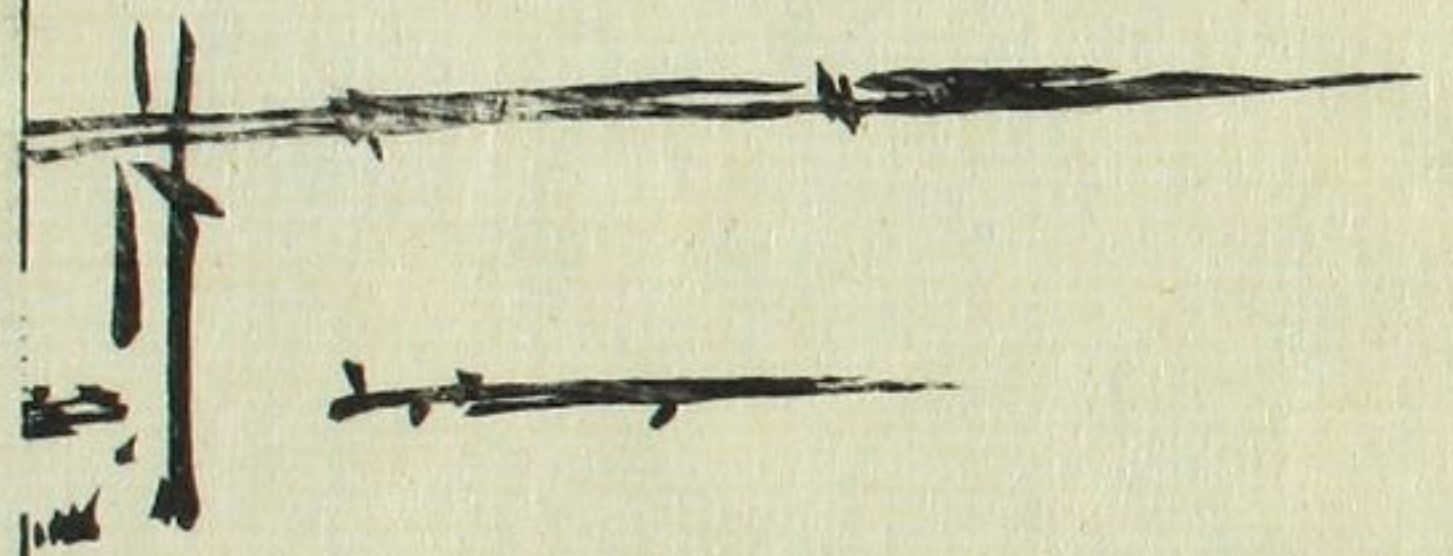


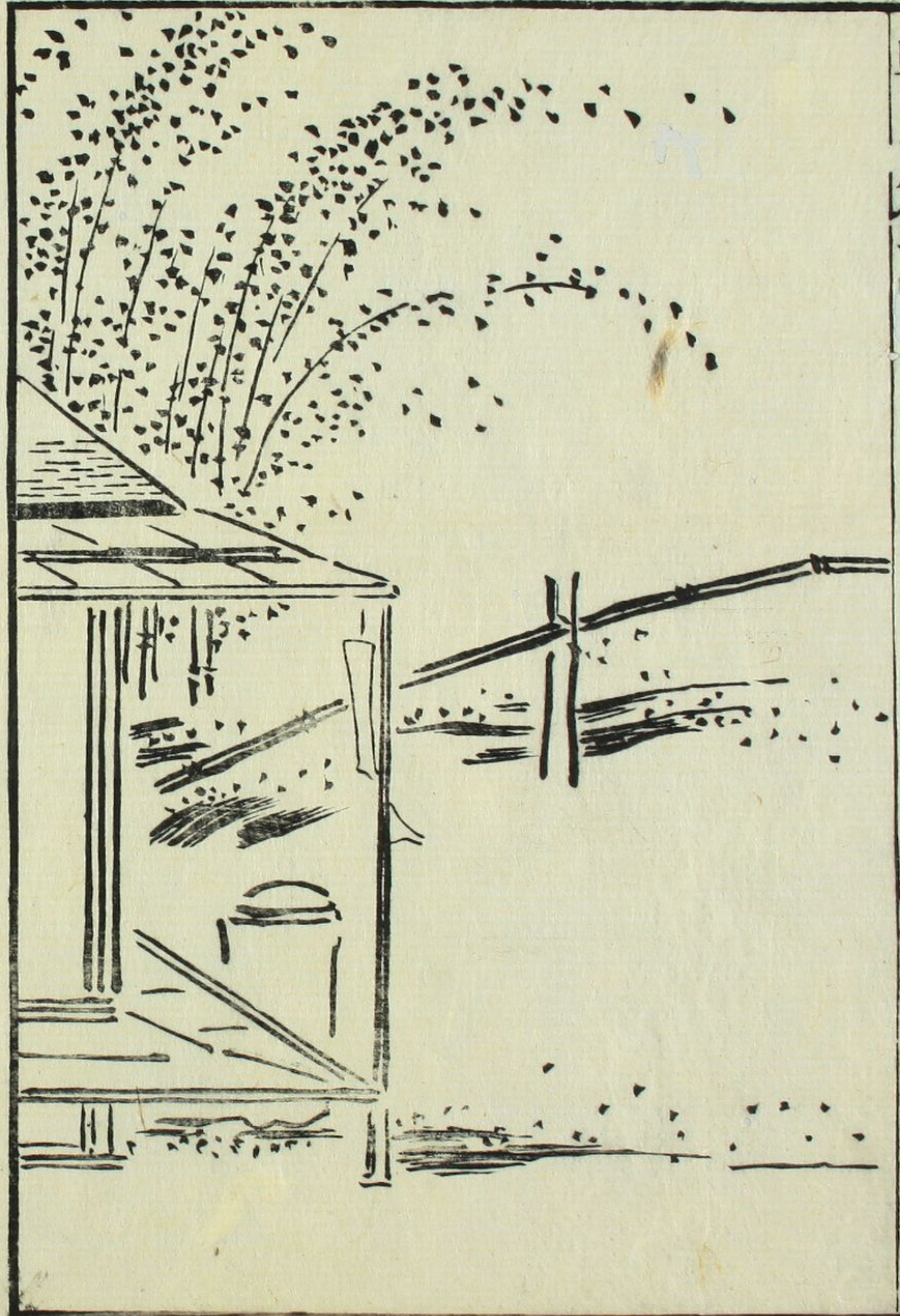
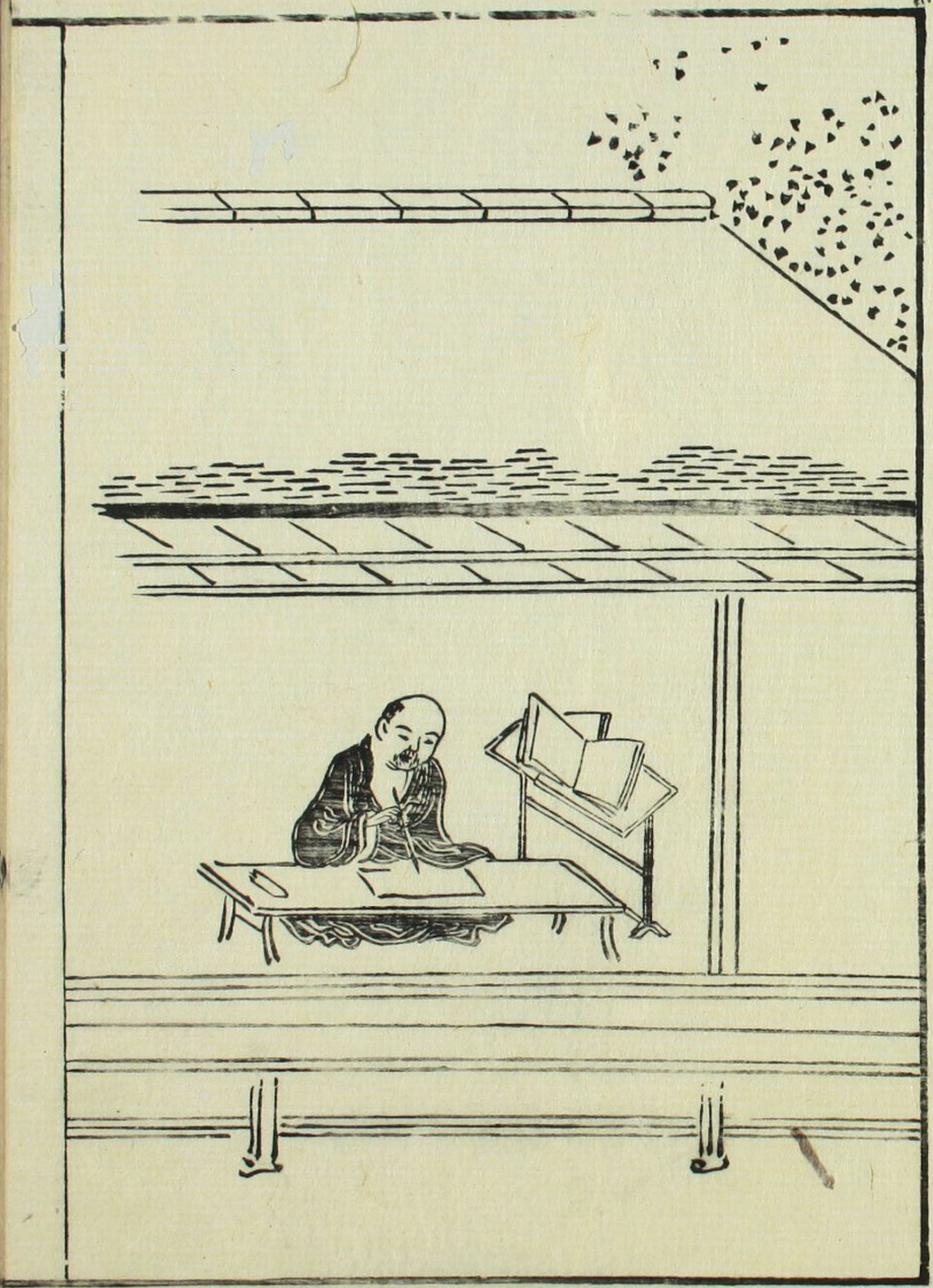
改^ま佛^{ぶつ}物^{ぶつ}を^をて^て草^{くさ}瑞^{ずい}物^{ぶつ}は^はち^ち高^{たか}き^き
 うへ^へと^と色^{いろ}く^く筆^{ひつ}記^きを^をぬ^ぬり^りて^てや^やり^り
 たち^ちる^るに^に静^{せい}室^{しつ}に^にこ^こま^まり^りて^て再^{さい}聞^{もん}乃^の
 法^{みち}を^をあ^あら^らわ^わく^くと^と志^しを^をし^して^て下^{した}に^にい^いて^て
 遊^{あそ}び^び陽^{やう}命^{めい}印^{いん}形^{ぎやう}抄^{しやう}三^{さん}帖^{てつ}西^{さい}要^{やう}抄^{しやう}
 上^{かみ}下^{した}是^{こゝ}た^たら^ら他^た日^{にち}は^はら^らに^に父^{ちち}子^こ相^あ迎^{むか}ひ^ひ

上下を志して師承の旨を述
 淨教の本意をあらわすに
 此の抄より一具として
 通る二部七冊をのこし
 抄のまじりたる教は
 此のまじりたる教は
 此のまじりたる教は

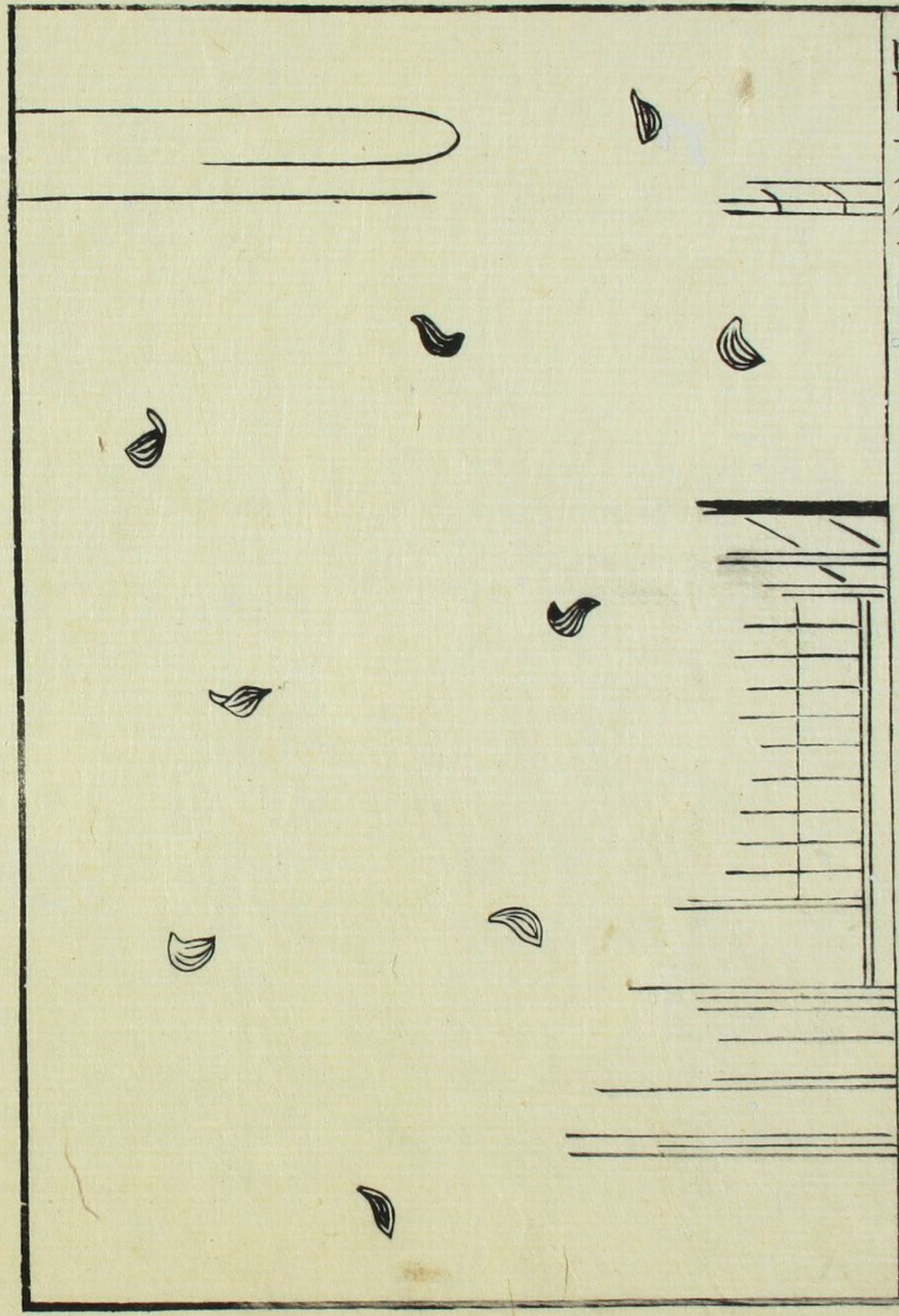
縁起を記し我朝乃佛説

此のまじりたる教は
 此のまじりたる教は





向阿上人傳下

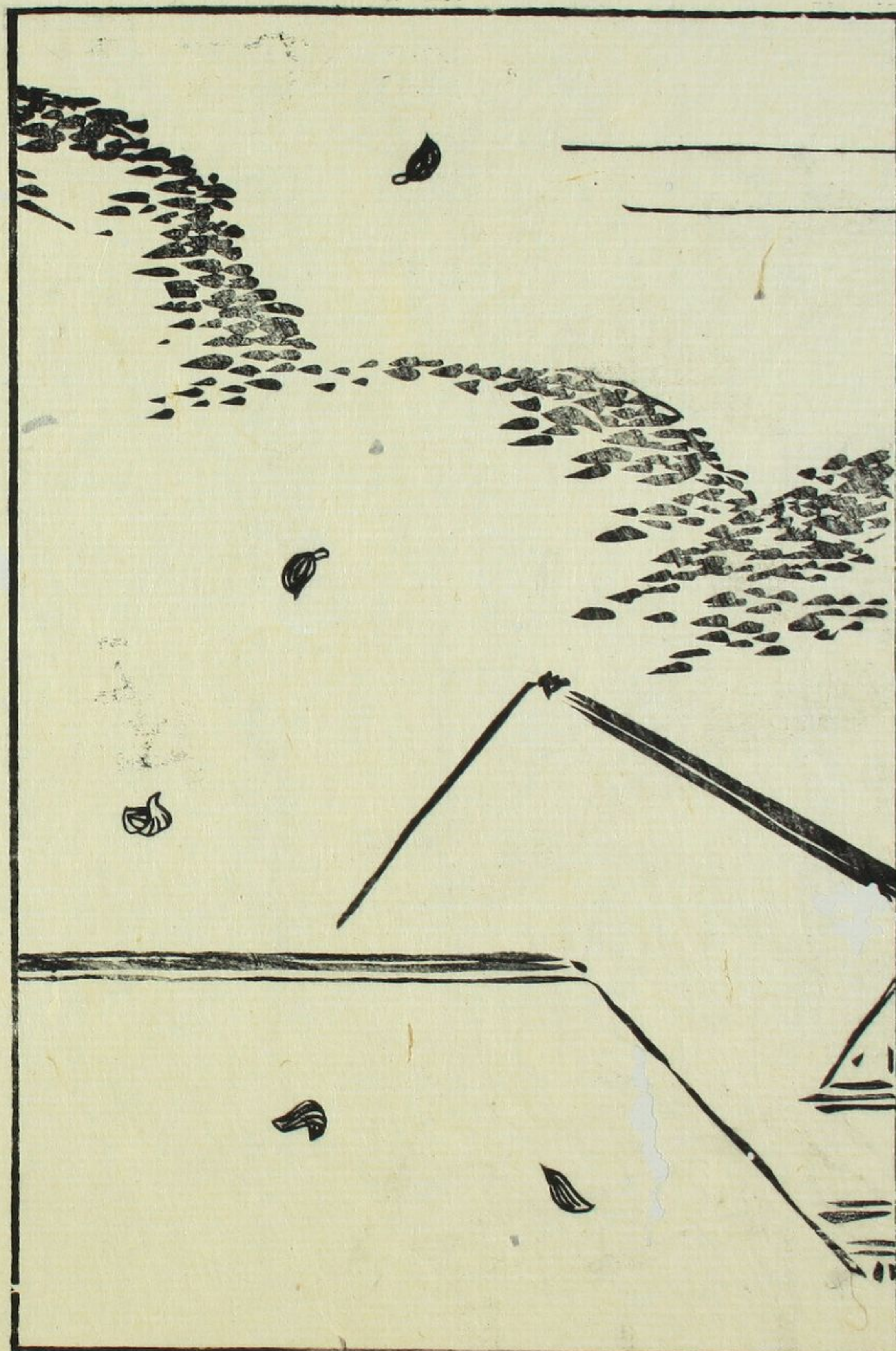


ありて因ゆゑ人重ちゆう法ぽうたらりたられい
 湯ゆ仰やうの貴き賤せん展てん轉くわんしてまさるし
 一い梅うめ名なはなままのの走そういいつつるる
 秘ひ要やうととありい應おう取とりる隆りゆう去きょええ法ぽう早そう
 とと寸すんととろろ一い緇し林りんのの翹きやう楚そ台たい教きやうの
 白くわく眉びとと一い道だう心しん源げん固こののて

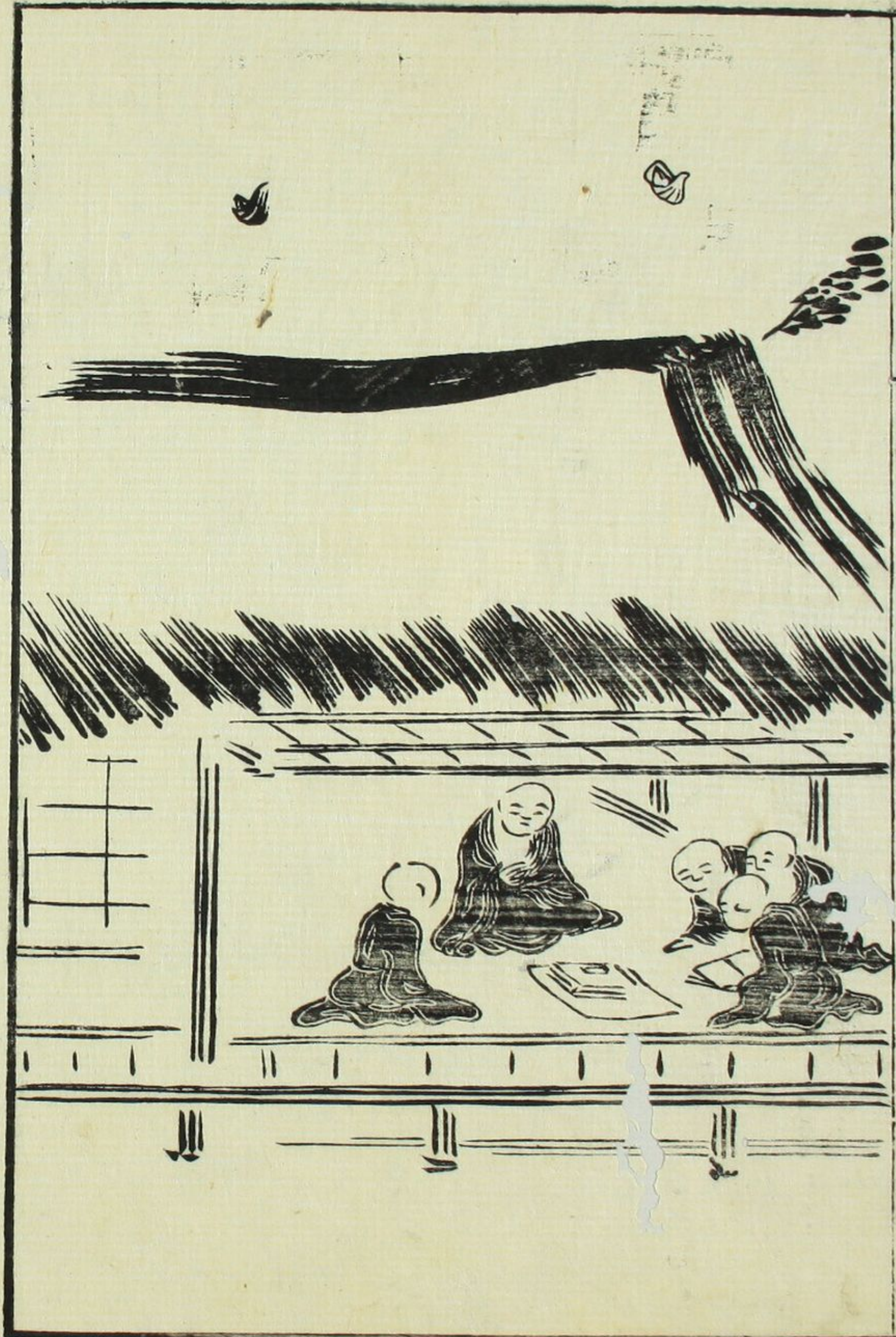
上り他のの先よはく解げ後ごの
 ありは読し、か故この書しよ寫しやすたを
 書よ、ちの結むすぶ事ことに近ちか世よの
 学者がくしよのいふ、先まより和わ字じ紙し并な筆ひつ
 ちの結むすぶ事ことに近ちか世よの
 といふの傳つたへたよ、事ことは、
 といふ

田でん丈ぶ野や人にんといふ、
 言ごん中ちゆうの旨し誦じゆををはめ、
 南なんの月げつををはめ、
 南なんの月げつををはめ、





向阿上人傳下



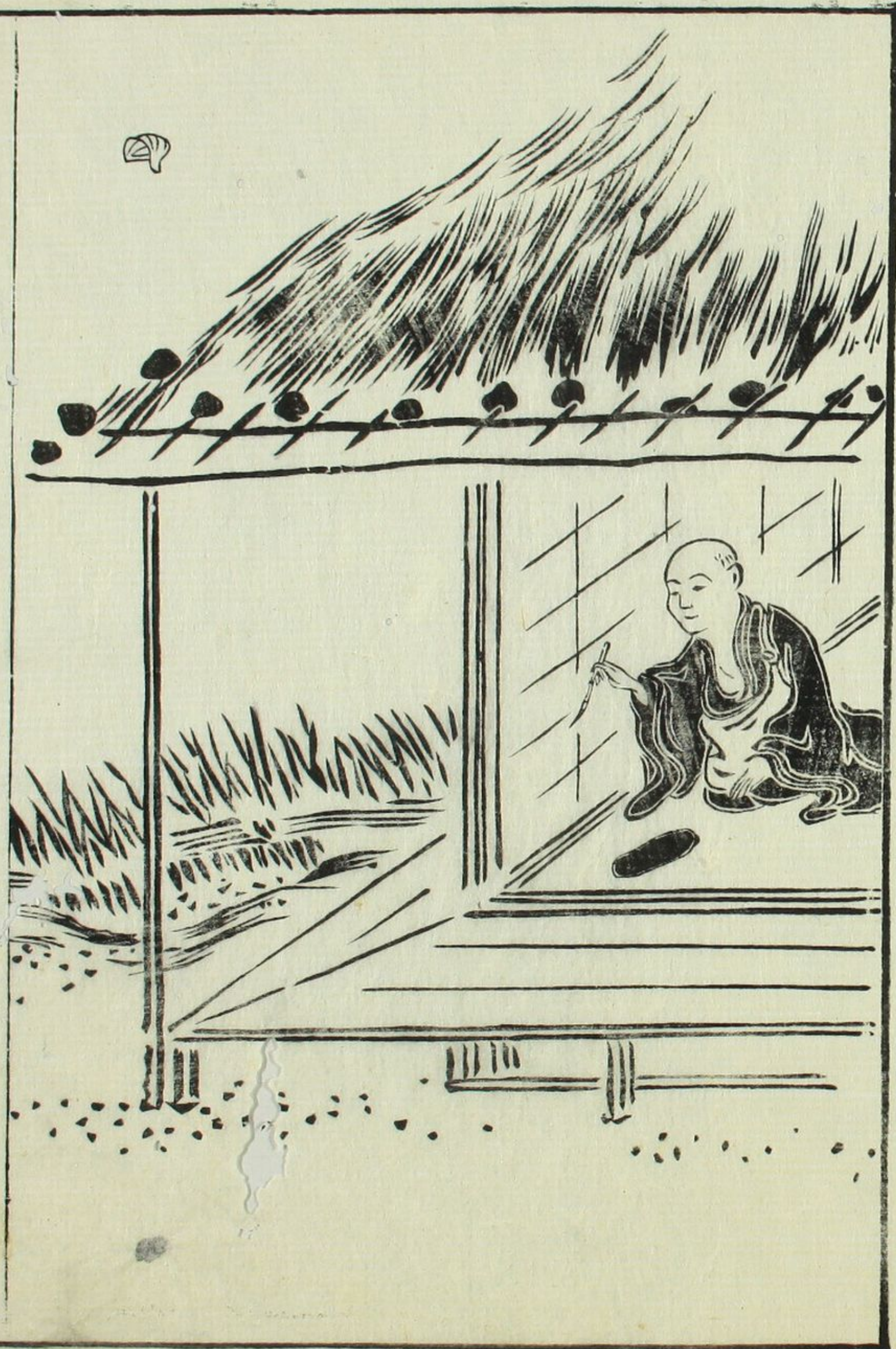
高よりいん屋よりかき始りては
 花洛の憤南をいん林下の
 幽洞をいん^{あま}並岡は東池よと
 いぬあまかきくわちる^{いかり}度むとん
 了すこ強く^{えん}まへ^{えん}の^{えん}ん
 よ西^ま要^まり^まに^ま強^まへ^まる^まに^ま強^まり^ま

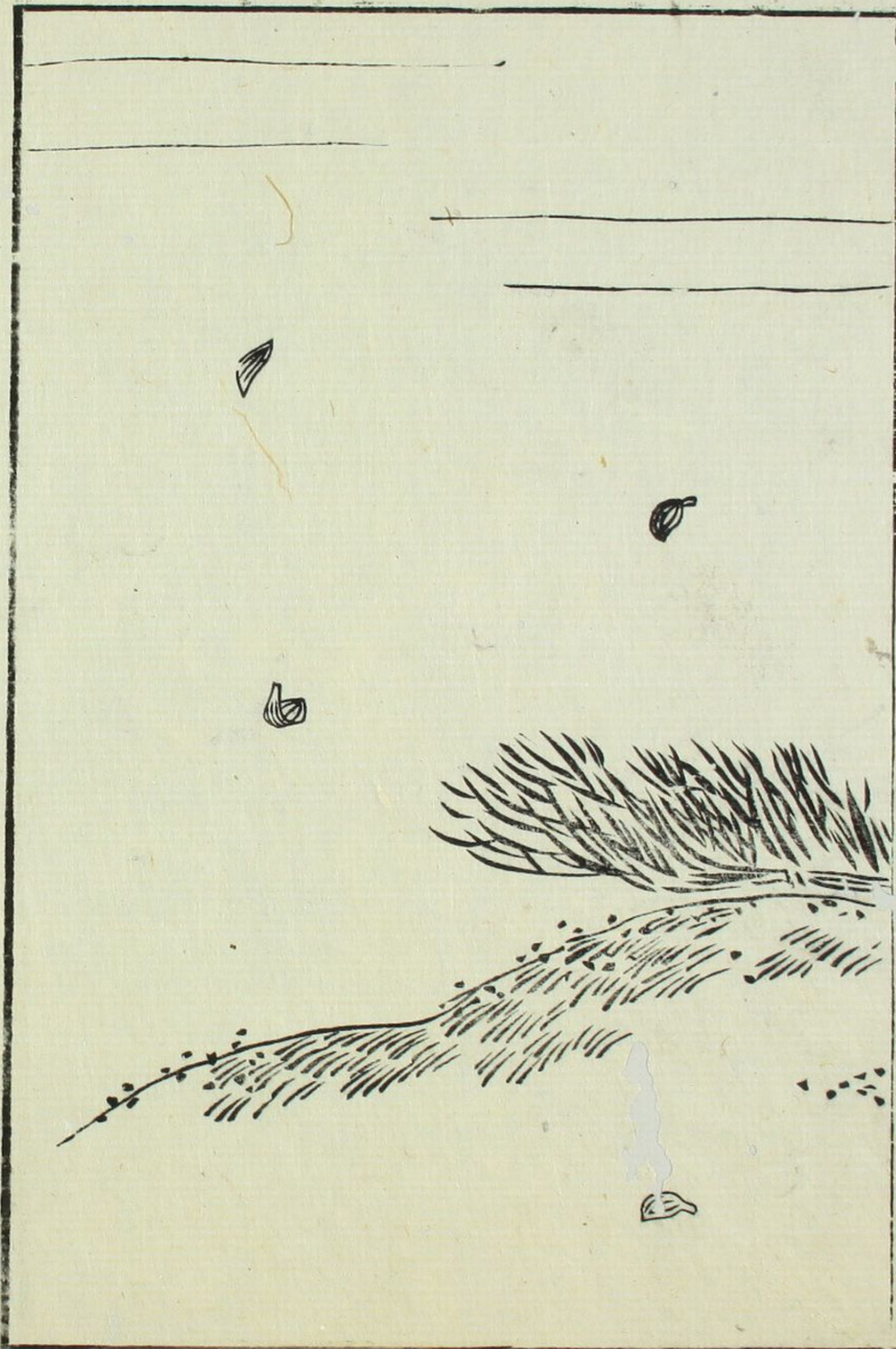
〜の書に記すに

池とていふに

たゞの池に

いふに

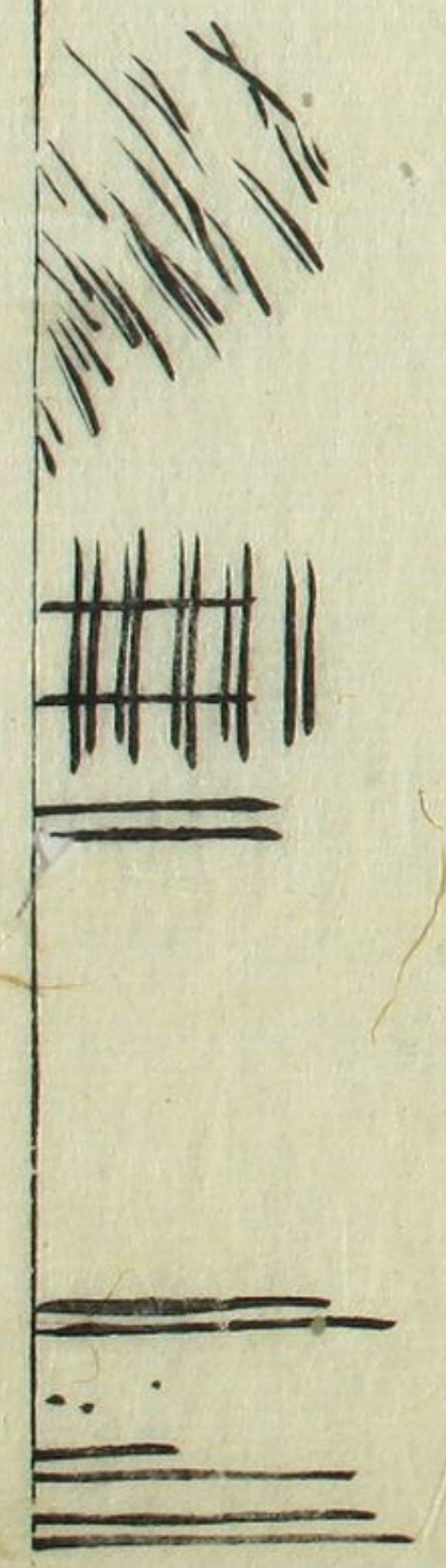




一の如くまゝなる生者必滅乃ち其
 一賢愚を悉くしつゝ家たのし
 ち此の光明院の正字貞和元年
 六月二日大徳の期に臨
 したまはりにて御念佛一法を時
 異天高くくはれて雲を雲なれん

けりしはす跡地照臨してひ
 里室よみくら聖衆羅列して
 うけ庭みす異音ちく薫り
 天樂軒らめくはけ端坐志く
 ゆよむらん寂然して息をえ
 行くも形容しととくれて眼口

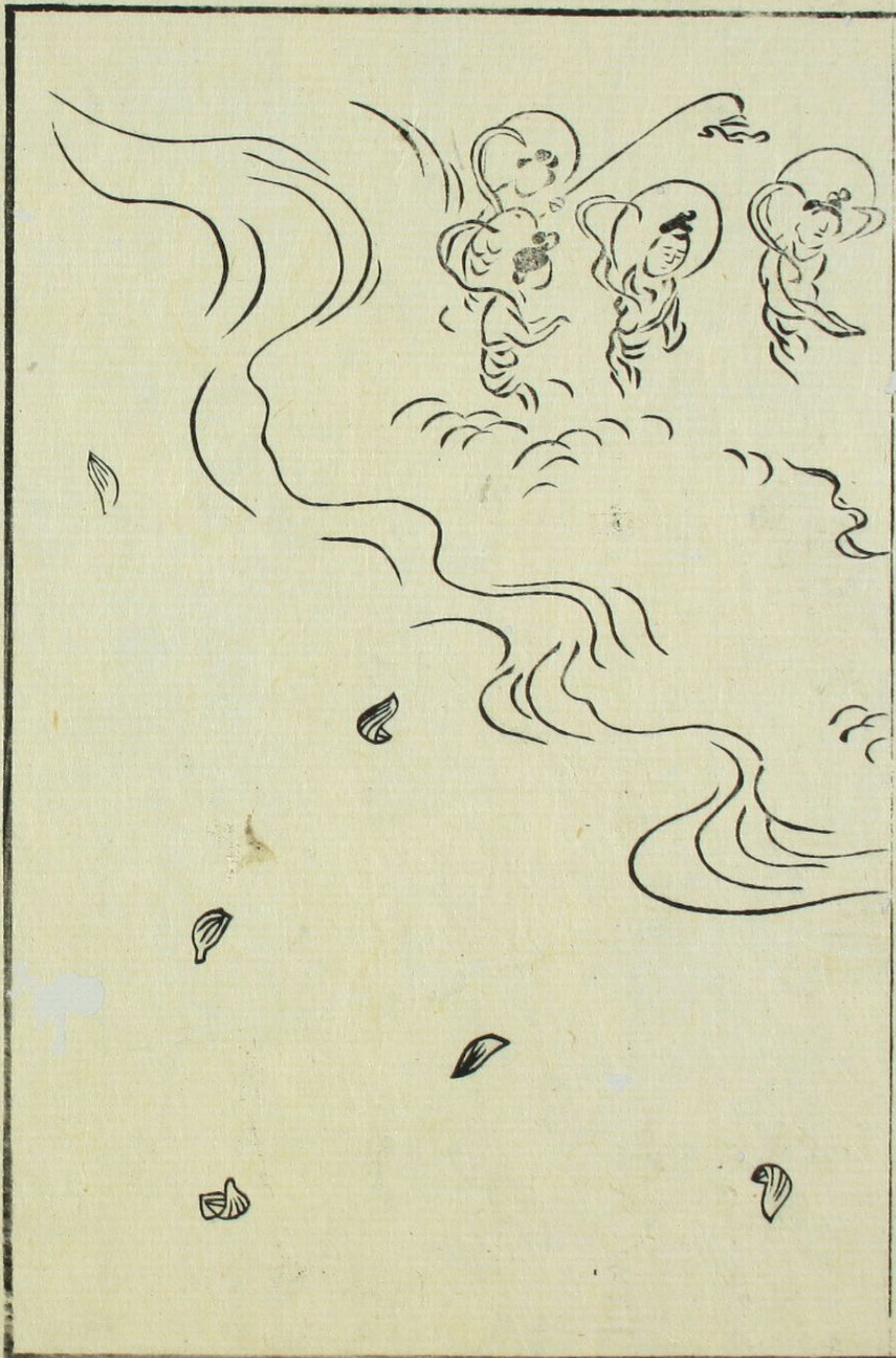
心見るに似るりすけ春枯い十三
 たり鳴呼法然してはす宗脈
 ちえん如くは縮素ほる名懐
 ゆるると慈み我表しとく





白阿上人傳下

九



たろれま生の雅行臨終の靈
 相ほろくまゝあはれの外に
 大王の應現たる由一介の西之養
 へり清浄の地たるより人々
 一四方は行者の遺跡より衆
 一し恩徳を報へ衆前より衆首

上心道心乃通有之
ちりり

向阿上人傳卷下

右向阿上人傳記一覽了實
殊勝高德之上人也或得文
毛於佛手著述三部書或
感松葉使法命壽勇健於

厭離穢土精進於欣求淨土
 宜後人結緣於上人早擲名
 利之心速赴菩提之門者也
 廣澤末荼前大僧正孝源



助	北村 小林 山川 兼義 小林 上田
刺	木原 菊田 高橋 並河 服部
資	石田 笥野 野口 中井 小林
名	霜 馬淵 小泉 井上 雷 内海

各家先亡增道

洛西雙岡池上村
西光庵藏版

天明七丁未年六月下旬

京都書林

知恩院古門前

澤田吉九衛門

寺町通佛光寺上町

赤井長兵衛

